論文の内容の要旨

論文題目　世俗を生きる出家者たち
—上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌—

氏名　　藏本　龍介

本論文の主要な問いは、「出家者としていかに生きることができるか」というものである。

キリスト教、イスラーム、仏教など、確立した聖典をもつ制度宗教は、いかに日常を生きるべきかという問題について、教義的な指針をもっている。それが宗教の経済倫理と呼ばれるものである。この問題について M. ウェーバーは、宗教の経済倫理が信徒の宗教実践を突き動かし、それが現実を変えていくという側面に注目している。しかし現実には、経済倫理の求めるとおりには生きられないような状況が生じうる。つまりある宗教の教義を実践するというのは、潜在的なジレンマを内包している。

そしてこうしたジレンマは、本論文が対象としている上座仏教の出家者において、特に顕著にみられる。なぜなら律と呼ばれる上座仏教教義は、出家者に対して、経済的な問題に関わることを厳しく制限しているからである。たとえば、経済活動や生産活動をしてはならない、財を好き勝手に所有してはならない、金銭に触れてはならない、といった制約である。こうした律を守る出家生活こそが、上座仏教の理想的境地である涅槃を実現するための、最適な手段であるとされている。しかしその一方で、出家者といえども、生きていくためには様々なモノやカネといった財を必要とする。したがってこうした律を守るならば、出家生活自体が成り立たない危険がある。

それではこうした教義的理想と経済的現実のジレンマを抱えている出家生活は、現実にどのように成立しうるのか。この問題について先行研究では、次のような 4 つの議論がなされている。一つ目は、出家者と在家者の間には共生的・互酬的な関係が成立しており、したがって律の制約は何ら問題にならないとする議論である。二つ目は、逆に、出家者と在家

者の関係には潜在的な矛盾があることに注目し、それゆえに現実の出家生活は揺れ動いているとする議論である。三つ目は、近代化と総称されるような社会変動に注目し、その中で出家者の経済基盤が掘り崩されていることを指摘する議論である。四つ目は、出家者が国家の統制に対して自律的であることに注目し、それゆえに出家生活は地域毎に多様であるとする議論である。

しかしこれらの研究は、いわば社会の側から出家者を捉えようとするものであり、出家者自身の視点に立つものではない。出家生活の実態を把握するためには、こうしたジレンマに、他ならぬ出家者自身がどのように対応しているのか、つまり律をどのように解釈・実践しているのか、その具体的な諸相を明らかにする必要がある。そこで本論文では、ミャンマーにおける現地調査を通じて、現実を生きる出家者の試行錯誤を分析することによって、上座仏教における教義と実践の複雑で動態的な関係を浮き彫りにすることを試みた。

以上の問題設定（第 1 章）を踏まえ、本論は 2 部構成とし、教義的理想と経済的現実のジレンマを、いわば両側から捉えるという方法をとっている。第 1 部では、経済的現実への対処という問題に注目し、現代ミャンマーという経済的現実に、出家者がいかに対応しているか、それが出家生活のあり方をどのように形づくっているか、という問題について検討した。

はじめに、本論文の分析対象であるミャンマーのサンガ、つまり出家者集団の歴史と構造を確認した。ミャンマー・サンガは歴史上、そして現在も、無数の派閥によって構成されている。しかし出家者のライフコースを検討した結果、都市の大教学僧院を結節点とした度重なる移動が、出家者同士のつながりと教学的な同質性をもたらしており、したがって分析対象としてミャンマー・サンガというまとまりを想定できるということを指摘した（第 2 章）。

次に、出家者が社会との関係をいかに調整し、財をどのように獲得しているかという問題について、最大都市ヤンゴンを事例として検討した。そして都市僧院の経済基盤や、都市における出家者による在家者向けサービスを分析することによって、先行研究の予想に反し、出家者は都市においてその繁栄を謳歌していると論じた（第 3 章）。

最後に、出家者が財をどのように所有・使用しているのかという問題について、僧院組織の実態と問題を分析した。そして僧院組織は、管財人としての在家者の存在を不可欠のものとするがゆえに、出家生活の清浄性や安定性が、在家者の量や質によって左右されてしまうという問題があることを指摘した（第 4 章）。

このように経済的現実への対処という問題に焦点を当てた第 1 部に対し、第 2 部では教義的理想の追求という問題に注目した。具体的には、律の厳守を標榜している二つの僧院を事例として、教義的理想をどのように追求しているのか、そしてそれがどのような展開を辿っているのかという問題について、よりミクロなレベルから検討した。

はじめに、分析対象である二つの僧院について、その設立背景について確認した。そしてこれらの僧院が、律厳守を標榜して森に拠点を構える「森の僧院」であること、そして僧院設立に布施者である都市住民の意向が深く関与していることを指摘した上で、こうした試みが植民地期以来の仏教改革運動――①在家仏教徒組織の仏教改革運動、②シュエジン派の仏教改革運動――に根ざしていると論じた（第 5 章）。

次に、これらの「森の僧院」が、社会から離れるという文字どおりの意味における「出家」を実現するために、社会との関係をいかに調整しているかという問題を、人類学における贈与論を参照しつつ検討した。そして「森の僧院」は、単に社会から空間的に離れるだけでなく、「与える」／「受け取る」ことを拒否することによって世俗、つまり贈与交換の世界を超えようとしており、それが一部の都市住民の帰依を受けて一定の成功を収めていることを指摘した（第 6 章）。

最後に、律に則った形で財を所有・使用するために行われた、在家者に僧院財産の管理をすべて委ねるという僧院組織改革の実態と問題を分析した。そしてこうした組織改革が、出家生活の清浄性と安定性に寄与している一方で、それが在家者による出家者管理につながるがゆえに、その正当性をめぐって、二つの僧院の間で対応が分かれていることを指摘した（第 7 章）。

以上の検討を踏まえ、最後に本論の結論と展望について述べた（第 8 章）。本論の検討からいえるのは、世俗から離れることを理想とするがゆえに、かえって世俗との関係をいかに調整するかという問題が最も重要になるという、逆説的な構造をもっているということである。それは具体的には、①社会といかに関わるか、そして②僧院組織内部における在家者といかに関わるか、という 2 つの問題として現れる。そしてその関わり方は、指向的か逃避的か、つまり向かうか離れるか、という 2 つに大別できるため、結果として現実の出家生活は、合計 4 つのパターンに分類することが可能である。

しかし重要なのは、どのパターンもそれぞれ固有の問題を抱えているということである。まず、社会との関わり方についてみるならば、在家者指向的である場合、布施を獲得するためには都合がいいが、「出家」の理想から遠ざかるという問題がある。その一方で、在家者逃避的である場合、「出家」の理想を追求するためには都合がいいが、①布施を十分に獲得できないという経済的なリスク、そして②カリスマ化することによって、かえって修行が損なわれてしまうというリスクを抱えている。

次に、僧院内部の在家者との関わり方についてみるならば、在家者指向的である場合、つまり在家者による僧院・出家者管理を認めるような場合、出家生活の清浄性・安定性を実現するための強力な手段となるが、同時に出家者の自律性を損なうことにもつながるという危険性がある。その一方で、在家者逃避的である場合、出家者は自律性を担保しうるが、在家者による僧院・出家者管理の恩恵を享受できないことになる。

したがって本論文では、「出家」という生き方には最適解がないこと、それゆえに現実の出家者たちは不断の試行錯誤を繰り返しながら、その生き方を紡ぎ出していると結論づけた。このように本論文の最大の特徴は、出家生活に内在するロジックを実証的に明らかにしたことにある。その成果は、単にミャンマー仏教研究のみならず、サンガ（出家者集団）の歴史的展開を解明する上でも、重要な意義をもつと考える。そしてそれは、出家者を重要な結節点とする仏教徒社会の来し方行く末を考える上でも、貴重なデータとなるだろう。また律という具体的なルールとその守り方に焦点を当てるという本論文の視点は、制度宗教における教義と実践の関係という問題を分析する上で、一つの有効な方法論となりうる。